

十五〜十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察

— カンボジアの事例を中心として —

遠藤 正之

キーワード

チャム人 カンボジア 『カンボジア王朝年代記』 トボーン・クモム スレイ・サントー王権

はじめに

チャンパーは二世紀に始まり十九世紀に消滅するまで、インドシナ半島の中・南部に拠点を構え、とりわけ十〜十七世紀にかけて海域東南アジア世界において繁栄を謳歌した。その痕跡は、現在中・南部ベトナムに残存する諸遺跡（ミーソン、ポー・ナガール、ポー・クロン・ガライなど）のみならず、タイシルクや雅楽の「林邑楽」にも遺され、その活動の広さがしのばれる。

チャンパーに関する研究を分野別に分類すると、(1)チャンパーの歴史研究と、(2)チャンパーの末裔としての「チャム人」研究とに大別できる。このうち、(1)については、十九世紀末から二十世紀前半にかけてフランス人東洋学者が主導したが、近年東南アジア海域世界における港市研究が進展するとともに、チャンパーの活動が再評価されるようになり、研究が再び盛んになっている[*Manguin, 1985*; 桃木, 1999 など]。

また、(2)については、さらに①チャンパーの故地とされるベトナム南部のニントウアン、ビントウアン両省(ファンラン、ファンリ、ファンティエットを中心とする地域)に居住するチャム人研究と、②それ以外の地域に居住するチャム人研究とに分類できる。前者については、彼らがチャム人研究とに分類できる。前者については、彼らがチャム人研究とに大別できる。このうち、(1)については、十九世紀末から二十世紀前半にかけてフランス人東洋学者が主導したが、近年東南アジア海域世界における港市研究が進展するとともに、チャンパーの活動が再評価されるようになり、研究が再び盛んになっている[*Manguin, 1985*; 桃木, 1999 など]。

ンパーの故地とされる地域に居住し、チャンパー時代の伝統と思われる独自の風習を保持しているが故に、以前から研究者の関心が向けられてきた。これに対し後者については、これまで専門的な研究はほとんどなされていない。その理由として、チャンパーの故地に住むチャム人のみがチャンパーの「正式な未裔」とされ、それ以外、すなわちカンボジアやメコンデルタ地域に居住するチャム人はそのようには認知されず、研究の対象として重視されなかったことがあげられる。

しかしながら、カンボジアのチャム人の現状を見ると、その活動には目を見張るものがある。現在、カンボジアに居住するチャム人の人口は、おおよそ二十五万〜四十万人とされ、ベトナムのそれよりはるかに多い。彼らはほとんどがムスリムで、他のイスラーム諸国と密接な関係を保持³⁾。東南アジア諸国の中では、インドネシア、マレーシアとの関係が深い。特に後者との関係は密接で、ポル・ポト時代にチャム人が最も多く亡命した国はマレーシアだった。現在では、両国からイスラーム導師が布教に訪れる一方で、チャム人の側も、殊にマレーシアへ留学する者が多い。

政治的側面に目を向けると、現連立政権内にて相当数の下院議員や各省庁幹部が活動している。代表的な人物としては、人民党（現政権与党第一党、内戦時のプノンペン政

権）ではマット・リー下院議員、ザツカリヤ・アダム宗教省副長官、オスマン・ハーサン下院議員兼イスラーム問題担当首相顧問らが、フンシンペック党（現政権与党第二党、王党派、内戦時のシハヌーク派が前身）ではトル・ロアツ副首相兼教育相、アーマー・ツ・ヤツヤ公共事業省長官、イスマエル・オスマン宗教省副長官らがいる。また、クメール民族至上主義が極めて濃厚な野党、サム・ランシー党にすら、下院議員一名が所属している。とりわけ、人民党はチャム人の支持を獲得すべく、物心両面にわたって積極的な支援を実施している。既にカンボジア社会の一員となっているチャム人の社会的影響力を無視できないからである。

このように見ると、カンボジアのチャム人は、カンボジア社会において、極めてアクティヴに活動していることがわかる。彼らはまさに「国家や異文化間の差異を自らの活躍の場として、ダイナミックに存在してきた人びと」⁴⁾、「田村、[1997: 37]の一事例である。そうした視点から彼らを見たとき、「国家」とその中で多数を占める人々が主役であった従来の歴史学では見えにくかった諸側面を明らかにし得るのではあるまいか。

本稿は、以上のような問題意識に基づき、カンボジアのチャム人の移住と活動の歴史について考察する。ただし、一口に移住と活動の歴史と言っても、その時代は幅広く、

十五〜十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察（遠藤）

数百年規模にわたり、その全てについて本稿で考察することはできない。それ故、本稿では特に、(一)十五世紀にチャンパーを襲った大変化とそれに伴って起こったチャム人の東南アジア各地、特にカンボジアへの移住(移住の「第一波」と)、(二)十六世紀末のカンボジアにおけるチャム人の活動を考察の対象とする。(一)を対象とするのは、この時代にチャンパーはベトナムの南進により、その国としての構造を大きく変えることになり、またそれによってカンボジアをはじめとする東南アジア各地にかなりの数のチャム人が移住することになったからである。一方、(二)を対象とするのは、この時代東南アジアは商業活動が活性化された「交易の時代」を迎えており、その中で活動する彼らの姿を捉えることにより、チャンパー及びチャム人の特質を、新しい側面から考察し得ると考えるからである。

一、研究史

前述した通り、カンボジアをはじめとするチャンパーの故地以外の地域に居住するチャム人に関する先行研究の蓄積は十分とは言えない。それでも、民族誌学の分野ではそれなりに研究が行われてきた。

まず、エモニエがチャム人の宗教・慣習に関する報告の

中で、カンボジアのチャム人に言及している[Aymonier, 2000: 58-65]。次に、「仏領インドシナのイスラーム」の一部としてカンボジアのチャム人を採り上げたネールの報告がある[Ner, 1942]。しかし、両者ともその関心はチャム人の宗教・慣習にあり、移住やカンボジアにおける活動の実態など、その歴史に関しては何ら述べるところはない。

最近の業績としては一九八七年のチャンパーセミナーにおけるマック・プアンの報告[Mak Phoen, 1994]、エクスンプロヴァンスに提出されたロベの博士論文[Robert, 1997未公刊]がある。前者はカンボジアにおけるチャム人の移住・活動の歴史を概観した初めての業績である。ただし、利用史料が『カンボジア王朝年代記』に偏り、その結果、カンボジア王権とチャム人との間に平和的・生産的關係が存在し得た理由を、王権側の寛容にのみ求める[Mak Phoen, 1994: 85]など、その社会的背景の考察が欠けている。後者は政治学的側面からの考察が中心であり、歴史面についてはマック・プアンの報告の引用に留まっている。

日本では、桃木至朗がチャンパーについて積極的に採り上げ「桃木, 1994: 1999: 2001など」、「カンボジアのチャム人」についても東南アジア世界におけるチャム人の活躍を示す事例として断片的に言及している。ただし、関心の主体がベトナム南部のチャンパー勢力にあり、カンボジア

についての言及は少ない。今永清^二はカンボジアのチャム人の現地調査を実施し、その実態を報告している〔今永、1998⁷〕が、歴史面については、ロベ同様マック・プアン報告を引用しているのみである。

二、利用可能史料の問題点

カンボジアのチャム人に関する歴史を考察するためには、まず史料の問題から始めなければならない。残念ながら、彼ら自身の手による史料は存在しない。特に、一九七五年〜七九年の四年にわたるポル・ポト政権時代に、カンボジア在住のチャム人は、「非クメール」であることとムスリムであることが災いして徹底的な弾圧・虐殺にさらされた。その結果、彼らが保有していたとされる古文書なども全て破棄されてしまったという。

本稿で扱う時代は、カンボジア史ではいわゆる「ポスト・アンコール時代」(一四三一頃〜一八六三)に含まれる。この「ポスト・アンコール時代」は、アンコール王都の放棄に始まり、フランスの保護国となるまでの約四三〇年間に指す。この時代は、カンボジアがシヤム・ベトナムの両隣国に挟撃され、その領域を喪失していった時代であり、従来は大遺跡群に象徴される「栄光の」アンコール時代に続

く「衰退期」と位置づけられてきた。しかし研究の進展とともに、アンコール時代とポスト・アンコール時代の間に連続性が見られないことが指摘され〔北川、1999: 234-237〕、同時にポスト・アンコール時代とは、国家としてのカンボジアの性格がそれまでの農業を基盤とする国家から交易を基盤とする国家に変わった時代であると捉える見方が提示され〔Vickery, 1997: 509-522〕、単なるアンコール以後の衰退期という見方には再検討が加えられつつある。

この時代を検討するための史料としては、十八世紀末以降に編纂された『カンボジア王朝年代記』(以下『年代記』)が存在し、また同時代史料としては外国人の記録も利用が可能である。『年代記』は、今日の王家につながるとされる、十八世紀末に王位にあったアン・エーン王の家系の正統性を示すことを目的として編纂されたもので、十四世紀のニピエンナポット王の治世から十八世紀末以降の当代に至るまでの歴代の王統記である。『年代記』は、後世の編纂物であることから、その記述の「信憑性」がしばしば問題にされてきた。また、王家の名譽を損なう史実―戦争での敗北など―には沈黙する一方で、祭儀を必要以上に詳述する傾向があることも指摘されてきた〔グロリエ、1997: 22-23〕。しかしながら、この時代の諸事件を系統的に記録している史料は『年代記』以外存在しない。また、十六世紀以降の



地図：インドシナ半島南部

『年代記』の叙述については、諸写本の検討及びヨーロッパ史料との比較などから、事実の比定が可能である。「グロリア・1997:45」。さらに、『年代記』はカンボジアの伝統王権によって完成された歴史叙述である[北川, 2001b: 025]ため、そこから王家の「チャム観」を考察することも可能となる。そうした作業を通じて、「カンボジアにおけるチャム人」の歴史を再構成すると同時に、従来クメールを中心にして語られていたカンボジア史を別の角度から検討することもできるのではないかと考えられる。

本稿では、現段階において筆者が入手し得た四種類の『年代記』を使用する。すなわち①ガルニエ本[Garnier, 1871: 336-385; 1872: 112-144]、②ムーラ本[Moura, 1883]、③仏訳VJ本[Mak Pheunn, 1981; Khin Sok, 1988]、④アン・エーン断片[Cœdes, 1989: 67-80]である。このうち①は一八一八年に当時の国王が編纂させたノン本と呼ばれるものの仏訳である。②は一八七八年から一八八三年の間に編纂された編者不明の年代記の仏訳である。③は一九〇三年にノロドム王がオクニャ・ヴェアン・チュオンに編纂を命じ、シソワット・モニヴォン王時代の一九三四年二月に出版された[Mak Pheunn, 1995: 9-10; 15-16]。その一部がマック・プアンらによって仏訳・出版され、本稿ではこの仏訳本を使用した。④は一七九六年にアン・エーン王

がシャム王に献上したもので、オリジナルは失われ、現存しているのはタイ語訳のみである。一九一八年にセデスが仏訳・出版した。

これらの『年代記』諸版本は、いずれも断片的ながらチャム人に関する記述を有している。そのうち、①②③については各版本の内容を比較検討し、同時代史料であるスペイン史料の記述と照らし合わせることにより、当時のチャム人の活動をそれなりに再構成することが可能である。一方、④は十四世紀半ばから十五世紀半ば頃までをその記述範囲とする[Cœdes, 1989: 68]。この時期については比較検討の対象となる同時代史料が存在しない。また、内容的にも他の『年代記』諸版本とはかなり異なっている。このため、その内容を直ちに史実として受け入れることは危険であるが、後述するように、当時のカンボジアとチャンパーとの関係を示すチャンパー碑文及び中国史料が断片的ながら存在し、それとの比較検討を実施することにより、アン・エーン断片も貴重な史料として活用できる。

三、チャム人のカンボジア移住

― 第一の波―十五世紀後半、特に一四七一年

①十〜十五世紀前半までのカンボジアへのチャム人の移

十五～十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察（遠藤）

住と活動

一般にチャム人のカンボジアを含む東南アジア各地への移住が活発になったのは、十五世紀にベトナムの南進が活発化した以降であるとされる。しかしながら、実際はそれ以前にも交易などを通じて周辺地域と交流が行われていた。特に、カンボジアとの交流は、距離的に近接していることもあって、緊密なものがあつた。ジャヤヴァアルマン七世（在位一一八一頃～一二二〇頃）治下のアンコールでチャンパーの王子が養育された事例〔Coedes, 1968: 170〕や、「占城から入ってくる布がある（服飾条）」人の胆を採取して占城王に贈った（取胆条）〔周, 1989: 21: 76〕といった、十三世紀末当時のカンボジア社会の様子を伝える『真臘風土記』の記述は、王族間や交易面における両者の交流を示唆している。

また、チャンパーとアンコールは、特に十一世紀から十三世紀にかけて盛んに戦争していた。例えば、一〇八〇年にチャンパーがメコン河流域の要衝サンポールを占領しているし、一一四五年にはアンコール王スールヤヴァアルマン二世がチャンパーの首都ヴィジャヤを陥れ、四年にわたって占領している。一一七七年には今度はチャンパーがアンコール王都を急襲・占領した。一二〇三年には、ジャヤヴァアルマン七世がチャンパーを併合し、一二二〇年まで支配し

た〔Coedes, 1968: 152; 164-166; 171〕。このように両者間に戦争が頻発した要因は、メコン河流域地帯の支配をめぐることであると考えられる。後述するように、この地域は沈香^①を中心とした、特に中国市場向け産品（森林生産物）の産出地であつた。こうした産品を集荷し、国際交易ルートに搬出することで、莫大な利益をあげることができた。

こうした戦争を通じて、メコン河流域地帯には、クメールの勢力が浸透する一方でチャンパーの拠点も形成されていった。一七七年のチャンパー水軍によるアンコールの急襲・攻略〔Coedes, 1968: 166〕は、カンボジアの地理に関する詳細な知識を有することを前提として初めて可能であり、アンコール朝の領域を熟知した相当数のチャム人の存在を暗示している。

十四世紀後半から十五世紀前半にかけてのカンボジアの状況については、同時代史料の欠如から不明の点が多い。ただ、『真臘風土記』村落条には「しばしば暹（シヤム）人と交兵したために、遂に〔地方の村落は〕みな広広とした荒地となるに至つた」〔周, 1989: 75〕とあり、十三世紀後半以降シヤムとアンコールの抗争が激化し、アンコールの勢力下にある地方が荒廃しつつあつたことがわかる。十四世紀に入ると、新興のアユタヤ朝が成立し（一三五一年）、数回にわたつてアンコールを攻撃し、一四三一年には王都

アンコールは放棄されるに至った〔Cœdes, 1968: 236-237〕。このように、シャム人勢力との抗争によって、アンコールの勢力は弱体化していったのである。それに加え、東西交易の活性化とともに森林生産物への需要が増大したことを背景として、メコン河流域に新たな政治勢力が勃興してきた。『実録』によれば、洪武四年（一三七二年）に「真臘国巴山王」が朝貢したという〔『明太祖実録』洪武四年十一月条〕。この「巴山」は、『年代記』に現れる「スレイ・サントー地方のバサンの村（ムーラ本）〔Moura, 1883: 39〕」「スレイ・サントー地方のバサンの丘（VJ本）〔Khin Sok, 1988: 66〕」の「バサン」の音訳であると考えられる。『年代記』においては、バサンはあくまでもアンコール王都を放棄した王とされるポニエ・ヤート王の「遷都」先に過ぎず、アンコールと拠点を異にする「独立した勢力」としては描かれていない。しかし、すでにアンコール時代から十八世紀に至るまで、この地域に大量の陶磁器を収集し得るセンターが存在していた〔北川, 2000: 57〕ことから、有力な地方勢力が存在していたことは確実である。そして、その勢力は十四世紀後半には中国に朝貢を行い得る程の力を蓄えていたのである。

この時代のチャム人の活動については、『年代記』（アン・エーン断片）以下の記述がある。「Gankhat（吾時の国王

史苑（第六三卷一号）

具体的に誰を指すのかは不明）はアユタヤ討伐を思い立ち、チャンタブリを攻撃して多くの捕虜を得た。しかし、インド人とチャム人の首長たちがMuan Caturahmug（ブノンペン）を攻め、金銀の仏像を奪い、Grön Brah Bej（不明）に迫った。GankhatはNagara Hivan（王都、ただし具体的な場所不明）に戻り、彼らを迎撃したが勝利することができなかった。GankhatはNan Brah Dharami（神の名と思われるが詳細は不明）に勝利を祈願し（中略）、その加護を得て水軍戦でインド人とチャム人を打ち破り、敵の遺体がBrah Bej運河（不明）を埋め尽くした。その後、チャム人の首長たちの反乱も鎮圧された〔Cœdes, 1989: 77-78〕⁽²⁾。

前述した通り、アン・エーン断片の記述範囲は十四世紀半ばから十五世紀半ば頃までである。この頃のチャンパーとカンボジアの関係を見ると、十五世紀前半に両者の間に緊張関係が存在したことが、チャンパー碑文及び中国史料から明らかになる。まず、ビエンホア碑文（一四二一）によると、チャンパー王ジャヤ・シンハヴァルマン（六世）の息子であるNauk Glaun Vijaya王子がアンナン王国を打ち破り、Brah Kandaの町（不明）を奪ってチャンパー王国に帰還した。その後、彼はクメールを征服した際に得た戦利品を財源としてTribhuvanākṛanta（ヴィシュヌ）神像を建立したと云う〔Cabaton, 1904: 687-690〕。また、『明

実録』によると、永楽十二年（一四一四）二月に真臘が朝貢した際、しばしば占城の侵掠を被っていることを訴えたので、勅命を發して占城国王占巴的頼を戒め、友好関係を保つよう命じたという（『明太宗実録』永楽十二年二月条）。

以上のことから、アン・エーン断片の記述は、十四世紀後半から十五世紀前半にかけてチャンパー・カンボジア間に存在した緊張関係を反映したものと見えよう。この緊張関係は、十三世紀初頭までの事例のようなチャンパーとアンコールの間に存在したものとより、メコン河流域に新たに勃興してきた勢力とチャンパーとの間に起きたものと考えられる。また、「チャム人首長たちの反乱」があったという記述は、当時すでにカンボジアにかなりの数のチャム人が居住していたことを示唆している。

② 一四七一年の移住

ベトナムのチャンパーに対する攻勢は十五世紀に入ると活発化した。『大越史記全書』（以下『全書』）によると、辛卯浩徳二年（一四七二）、大越黎朝第五代皇帝聖宗が実施した遠征により、チャンパーの首都ヴィジャヤは陥落し、チャンパーの北半は広南承宣と升華衛としてベトナムの「直轄支配下」に置かれ、南半分については「藩龍（フアンラン）に走って占城主を稱した」將軍を「占城王」に、またこれ

とは別に華英、南蟠の二国を王に封じ、これらを「羈縻」した（『全書』辛卯浩徳二年条）。ベトナム側の主張によれば、チャンパーは大越の「属国」となったのである。

こうしたベトナムの攻勢は、『年代記』にもはつきりと見られる。例えば、以下のような記述がある。

「当時、チャム人とベトナム人はすでに何年にもわたって戦争をしていた。チャム人は敗れ、ベトナム人は、チャンパーの中ですでにベトナム人の王国に併合された（地方）出身の王子を王位に据えた。別のチャムの王子で Po Rann La Trá Tráp または Po Ginuor Saks（不明）なる人物はアンナンの臣下になることを拒み、強力な軍隊を動員し敵国に侵入した。王子は二つの地方を奪回することに成功した。しかし王子は、ベトナム人たちが Le Cantun（不明）を呼び寄せるのを前に、後退を余儀なくされた。ベトナム人の王であレ Le Nhanton（黎仁宗）または Bangki（邦基＝黎仁宗の名）は、一四五六年にかけて征服した地を取り戻し、（チャムの王子をその）王国まで追撃した。その時、チャンパー王は Pare Tunay（不明）の長の仲介により、 Si Suriyodaya に救援を求めに（使者を）派遣した。クメールの王子は、王国は戦争中であり、全兵力を必要としていると言い、（救援を）拒否した。救援はなく、チャンパー王は敗れ、捕虜となり、その王国は「大小の諸王国」に分割さ

れ、ベトナム人の監視を受けたチャムの小王たちの権限の下に置かれた。多くのチャム人たち、すなわち高官や(チャム王を)支持する人々は、一種の保護国という形を受け入れることを望まず、カンボジアやBhann(バナール)、『Ratae (ヒブ)』、『Jaray (ジャライ)』、『Moi (モイ)』の国に亡命した』 [Khin Sok引用, 1988: 248]⁽¹³⁾。

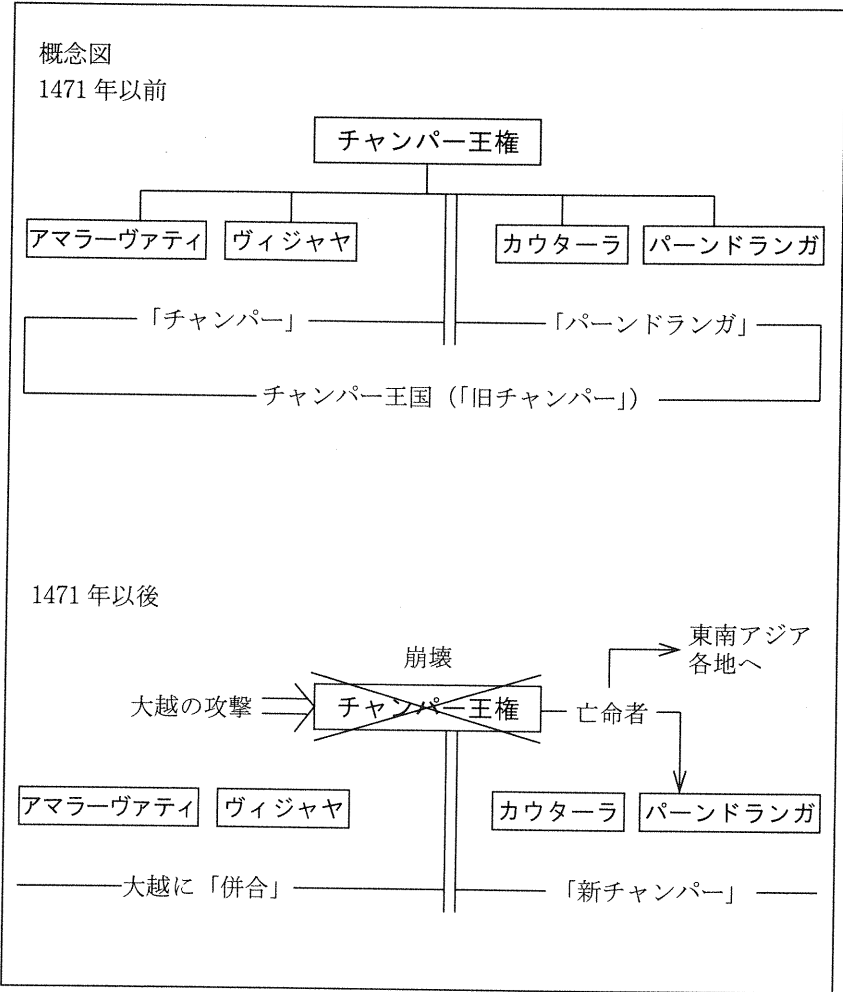
『全書』は、黎仁宗のチャンパー遠征の年次を丙申太和四年(一四四六)としている。従って、『年代記』の記述とは年次が一致しない。また、この遠征について、『全書』は、ベトナム軍がヴィジャヤを陥落させ、国王を捕らえ、多くの戦利品を得て帰国したと記すに留まり、それ以上のことは何ら述べていない。これに対し、黎聖宗の遠征後については、前述した『全書』の記事から、年代の点でやはり一致しないものの、チャンパーの南半分がベトナムの「保護国」となり、北半がベトナムに「併合」された点は『年代記』と一致する。以上のことから、この『年代記』の記述は、実際には黎聖宗の遠征を反映した記録であると考えるべきで、それを実行した皇帝名・時代が混同・混乱して編纂されたものの、当時の状況をそれなりに正確に伝えていると言い得る。また『年代記』は、ベトナム人の攻撃に窮して救援を求めたチャンパー王の使者に対し、クメール王子が「救援を」拒否した」ために「チャンパー王は敗れ」

史苑(第六三卷一号)

たとし、クメール側の動きの重要性を唱えている。

また、『スジャラ・ムラユ』によると、Kuchi(交趾)ベトナム)のラージャとの戦いに敗れたチャンパーのラージャの子息たちはその大臣らを伴って離散し、あらゆる方面へ逃れた。そのうちの一人であるShah Indra Bermanはワラックへ逃れ、時のスルトンであるマンスール・シャーに迎えられ、大臣のひとりに任命され、非常に信任されたという [Brown (tr.), 1970: 102-103]。マンスール・シャーの在位は一四五九年頃〜一四七七年であるから、この記述も十五世紀、特に一四七一年のベトナムのチャンパー征服活動に起因するチャム人のマレー世界への「亡命」という史実を反映したものと考えられる。

さらに、ムーラ本によれば、一五八三年(実際には一五九三年末から一五九四年初め)にアユタヤ王ナレースエン(在位一五九〇〜一六〇五)がカンボジア遠征を実施した際、遠征軍の中に「チャム人部隊一万人」が存在し、この部隊が所属するアユタヤ軍は「南方へ向かい、湖と大河を通ってバサック地方を攻略した」[Moura, 1883: 52]と云う。この記述によれば、ナレースエン時代のアユタヤ水軍の中に、数的にかなり大規模なチャム人部隊が存在したことになる⁽¹⁴⁾。実際、アユタヤ王朝に仕える「チャム人」「チャム人部隊」の存在を裏付ける記述は他にも存在する。例えば、タイの



法典である『三印法典』には「アーサー・チャーム（チャム人傭兵隊）」の存在が記されている【石井、2001：182】¹⁵⁾。また、少し時代が下るが、タシヤールによれば、ナライ王時代のアユタヤ宮廷にチャンパーの亡命王族が仕えていた。その末弟はマカッサルの王子と共謀して反乱を企てたが、その際彼が頼りにしたのが「チャンパ出身のマレー人隊長」であった。そして、この隊長の下に「三百人のマレー人」が従っていた【タシヤール、1991：430-431】。『年代記』諸写本や『スジャラ・ムラユ』にも記録されている「チャム人の亡命者」たちの中には、アユタヤをその亡命先として選び、その地で活動した人々も多数存在したのである。

一方、十五世紀のベトナムによるチャンパー攻撃によって、ヴィジャヤを中心としたチャンパー政権（仮に「旧チャンパー」とする）が崩壊した時、チャンパーの南部のパーンドランガへ逃れた人々もいた。

ここで、ヴィジャヤ陥落以前のチャンパーに目を向けてみる。この時代のチャンパーは、有力な地方政権の連合体であったが、その中でも十一世紀以降特に有力となったのが、現在のクイニョン近辺に位置するヴィジャヤとファンラン地域に位置するパーンドランガである¹⁶⁾。両者は、碑文では「チャンパー」と「パーンドランガ」、中国史料では「占城」と「寶瞳龍」という形でしばしば明確に区別されてい

た。【遠藤、1995：76-78】。また、チャンパーを形成する有力なクラン（内婚的血縁集団）として、「檳榔樹」と「椰子」の二つがあった。この両クランは、王国内における優位をめぐって戦争をしたり、同盟を結んだりを繰り返していたが、前者はパーンドランガを支配し、後者は北部を支配していた。また前者は種族的により純血であることを誇りとしていたらしい【Maspero, 1988：18】¹⁷⁾。

黎聖宗の遠征によってヴィジャヤを中心とする「旧チャンパー」は崩壊したが、その死後黎朝が衰退に向かったこともあって、南方に存在するパーンドランガに直ちに大越の影響力が及ぶことはなかった。このため、この地の有力勢力と「旧チャンパー」から逃れてきた王族とが結合して、パーンドランガが新たにチャンパーを称するようになった（概念図参照）。十五世紀末以後のヨーロッパ・中国史料に登場し、朱印船も赴いた「チャンパー」は、このようにしてパーンドランガの地に成立した政権である（以降「新チャンパー」とする）。

以上のように、十五世紀のベトナムによるチャンパー攻撃によって、大量の「チャム人亡命者」が発生するとともに、「チャンパー」という国そのものも大きな変化を被ることになったのである。

四、十六世紀のカンボジアにおけるチャム人の活動

―『年代記』とスペイン史料との対比から

①十六世紀（リエム・チューン・プレイリアナカパランの治世まで）の活動

十六世紀にはいと、メコン河流域のスレイ・サントーを中心とする勢力に加え、トンレ・サップ湖南岸のポーサットを拠点とする勢力が台頭し、両者はメコン河、トンレ・サップ河という二つの交易ルートの支配をめぐる対立するに至った。十六世紀初頭に生じたバサン（スレイ・サントー）を拠点とするスダチ・コーンとポーサットを拠点とするチャン・リエチエとの抗争はその典型である〔北川、1999:237-241〕。この争いは一五二五年にチャン・リエチエが勝利したことで決着し、同王は新王都ロヴェックを建設した。しかし、一五五五年にカンボジアを訪問したクルスが当時のカンボジアの主要都市の一つとしてシストル（スレイ・サントー）をあげている〔クルス、1996:47〕ことから、スレイ・サントーの勢力も依然として存在したことがわかる。

一五九三年にアユタヤのナレースエン王がカンボジア遠征を実施し、翌年王都ロヴェックが陥落・壊滅すると、再びスレイ・サントーが前面に現れた。すなわち、時の王サー

タはスレイ・サントーに逃れ、一時その地に落ち着いたが、ガルニエ本によればラオス〔Garnier, 1871:354-355〕、ムーラ本、VJ本によればストウン・トラヘンに逃れた〔Mouta, 1883:52-53; Khin Sok, 1988:205-215〕。この混乱に乗じてリエム・チューン・プレイがスレイ・サントーで即位した。リエム・チューン・プレイはシヤム軍を撃退して王国を一応復興したものの、VJ本によればその支配圏はスレイ・サントー周辺に限られ、それ以外の地域には常時影響力が及ばなかった〔Mak Phoun, 1981:71〕。結局、リエム・チューン・プレイは、彼と対立したスペイン・ポルトガル人達に殺害された。その後、ガルニエ本によればラオスに、ムーラ本及びVJ本によればトポーン・クモムに逃れていた、サータ王の末子チャウ・バニヤー・タン王子（バラマラージャ五世）が帰国し、スレイ・サントーで王位についた。

チャム人のカンボジアへの大量流入があった十五世紀後半から時代的には既に三十年以上を経ていることを考えると、当時チャム人達はすでにカンボジアで一定の活動基盤を獲得していたと思われるが、その活動は『年代記』には全く現れてこない。上述したように、スダチ・コーンはメコン河流域を拠点としていることから、その地域に居住していたチャム人達と何らかの関係を有していたことが想定で

きるし、リエム・チューン・プレイがチャム人を信頼し、その支持を得ていたことは、これから見るスペイン史料からも明らかである。しかし、スダチ・コーンとリエム・チューン・プレイ両王『年代記』はこの両王を前代の王を殺害・追放して即位した「篡奪王」としている―の事跡について述べた部分でもチャム人の活動ぶりは全く語られていない。

同時代史料であるスペイン史料には直接「チャム人」という表現は現れないが、「マライ人隊長」という表現が登場する。『年代記』においても「チャム人」と「マライ人」はまとめて一つの勢力として記されているし、フランス植民地文書もこの両者を同一視している。カンボジアでは伝統的にこの両者は明確に区別されることはなく、むしろ宗教的要因などにより、両者の間にはかなり密接な相互関係が存在した。従って、スペイン史料上のカンボジアの「マライ人」には、チャム人も含まれていたと考えられる。

「マライ人隊長」Ⅱオクニヤ・ラカサマナとカンコナがスペイン史料に初めて登場するのは、「シアン

の王がこの王国を壊滅させたとき」[モルガ1966:135]とあることから、ナレーヌエン大王による首都ロヴェック陥落直後Ⅱ一五九四年頃である。この時、この「マライ人隊長」達はチャンパーに赴いたが、チャンパー王の処遇を不満として、王の留守中に都を占領・略奪し、大砲と捕虜を得てカンボジア

に戻った。カンボジアでは新王アナカパラン(『年代記』でいうリエム・チューン・プレイ)が即位し、シヤムの軍勢を撃退して王国は一応復興されていた。「マライ人」隊長達は王に厚遇され、領地と高位を与えられた。彼らは、王にチャンパー遠征を進言し、遠征軍の将としてチャンパーに派遣されたが、その最中に王が交易上のトラブルからスペイン・ポルトガル人達に殺害されたため、帰国した。その後、王国は王位継承争いにより混乱したが、ラオスに逃れたプラウンカル・ランガラ王(『年代記』でいうサータ王)の末子であるプラウンカル(『年代記』でいうパラマラージャ五世)が帰国したとき彼らはこれに味方し、スペイン人達とともに、彼が王位につく際に活躍した[モルガ1966:135-138]。

モルガの記述を見ると、当時のカンボジアにおいて「マライ人隊長」達は重要な役割を果たしていたことがわかる。「マライ人隊長」達がチャンパーに赴いた理由については、「傭兵」として自らが使役し得る兵員を集めるため [Mak Pheun, 1990: 55] と、チャンパー王国に援軍を求めたためという二つの目的があったと考えられる。その後、彼らがカンボジアに戻ってアナカパラン王に仕えると、直ちに領地と高位を与えられたことや、チャンパー遠征の進言を王が受け入れ、実行したことなどから、「マライ人隊長」達は、王から相当厚い信任を得ていたことになる。

このような状況があつたにもかかわらず、両王の治世を始めたとするこの時代の『年代記』の記述にチャム人が全く登場しない理由として、『年代記』が編纂された時代背景が考えられる。すなわち『年代記』編纂の最大の目的は、カンボジア王家の正統性を示すことにある。『年代記』の諸版本の大半は十九〜二十世紀にかけて編纂されている。この時代のカンボジアを見ると、ベトナム及びシヤムの両隣国の勢力争いの舞台となり、その後両者の妥協によりアン・ドウオン王が即位した。同王の時代に国内交通網が整備され、現在の「カンボジア」の大枠が完成した。その後、カンボジアはフランスの保護国となったが、この時期に特にフランス人東洋学者達によるアンコール遺跡群の再発見と研究の進展があり、その結果アンコール時代が「カンボジアのルーツ」として認知された。こうした動きを背景として、カンボジア王家の側に「カンボジアを支配する正統権威としての王家」さらには「アンコール時代から綿々と続く由緒ある王家」といった意識が形成され、かかる意識を確立するために編纂されたのが一連の『年代記』であつた。こうした背景を考慮すると、「篡奪王」といえども「カンボジア王」と『年代記』が認知した王がクメール人以外の「異邦人」の協力を得て即位したという事実は、『年代記』編纂者達及び王家に容認し難かつたのであろう。

②十六世紀末の活動トボーン・クモム反乱

十六世紀に起こつた事柄を記した『年代記』にチャム人が登場するのは、十六世紀末に彼らが起こしたトボーン・クモムの反乱に関する記述である。当時、カンボジアは極度の混乱状態にあつた。すなわち、先に言及したパラマラージャ五世が即位したが、王国を復興させるには至らず、「王国に秩序が存在しない」状況となつた[*Mak Phoeun, 1981: 75*]⁽²⁰⁾。

このような混乱の中、トボーン・クモム反乱が勃発した。その年次は、V J本・ガルニエ本はいずれも一五九八年[*Mak Phoeun, 1981: 75; Garnier, 1871: 358*]、ムーラ本は一五八六年[*Moura, 1883: 54*]、一七〇断片は一五九九年[*Vickery, 1977: 209*]⁽²¹⁾としてゐる。反乱の経緯については、諸本とも概ね一致している。

その内容を要約すると、「トボーン・クモムの住人である「チャム人」*Po Rat*と*Lac Sminna*が同地で反乱を起し、⁽²²⁾独立を宣言した。このため、パラマラージャ五世は反乱を鎮圧すべく陸路トボーン・クモムに親征したが、反乱軍との戦いに敗れ殺害された。この結果*Po Rat*と*Duon Po Rat* ⁽²³⁾*Lac Sminna*は*uparāj*（副王）を称した」という。彼らは「*Lumdom*地方（現在のカンボジア南東部、スヴァーイー・リアン州）を始めとするメコン河東岸の各地を攻略し、さら

にプレイ・ノコー地方（現在のホー・チミン市一帯）まで勢力を伸ばした [Mak Pheun, 1995 : 89]。この反乱は、最後にはパラマラージャ七世によって鎮圧されたとされているが、その後の Po Ratylac Smina の運命についてはよくわからない。ムーラ本・VJ本によれば殺害されたという [Moura, 1883 : 55; Mak Pheun, 1981 : 111] が、他の版本はその結末を記していない。

『年代記』の記述を見る限り、このチャム人たちの反乱は大規模なものであった。『年代記』に見えるチャム人が攻略した地名ールムドム、プレイ・ノコーなどを検討すると、その範囲はメコン河東岸流域からベトナム南部にわたる広い範囲に及んだことがわかる。『年代記』によれば、この反乱が起きたとき、王国は混乱の極にあり、本来任命されるべき四名の大臣や官吏も任命できない状態であった [Mak Pheun, 1981 : 75]。また、ルイスは、プラウンカルIIパラマラージャ五世が「まだ子供で、彼の父よりも酒を飲み、彼の一切の関心は遊びと狩にあり、王国のことは全く顧みない」 [モルガ、1966 : 145] ない「暗君」であったとしている。このような状況がチャム人達の離反を招いたのである。

また、『年代記』によれば王国が混乱状態にあったため、王は国内を並定すべく、各地に軍を派遣していた [Mak Pheun, 1995 : 84]。ルイスは、カンボジア王は度重なる戦争のため

に財政が窮乏しており、フィリピン総督に献上する十分な品物を持ち合わせていないと述べている [モルガ、1966:146-147]。こうした度重なる軍事行動とそれによる財政窮乏に対応するために、交易上の要衝であったトボーン・クモムに相当な負担がかけられたことも反乱の原因となったと考えられる。この反乱は結局鎮圧されたことになっている。しかし、そのことがカンボジアにおけるチャム人の影響力の弱体化に直接つながることはなかった。それから半世紀もたないうちに、彼らがラーマディパティ一世（イスラーム改宗後はスルタン・イブラヒム）を擁立し、その権力を十数年にわたって支えた勢力であったことを『年代記』は記述しているからである。つまり、この反乱が鎮圧された後もチャム人は強力な勢力を保ち続けた。

③ スペイン史料に登場する「マライ人隊長」II オクニヤ・ラカサマナとカンコナ
スペイン史料によれば、上述したプラウンカル王IIパラマラージャ五世の即位に際して、「マライ人隊長」達は重要な役割を果たした。特に、その一人であるオクニヤ・ラカサマナは当時「最も強力な大砲類と快速帆船団」 [モルガ、1966 : 138] から成るカンボジア最強の軍勢力を有したという。

ルイスの書簡「モルガ、1966：134-139」によると、アナカパランがスペイン・ポルトガル勢力に殺害された後、カンボジア王室の高官オクニヤ・デ・チューが前王の次男であるチュピナヌを国王に擁立した。当時、「オクニヤ」は最高位の官人に付されるタイトルだった〔北川、1994：44-48〕。しかし、その支配は苛烈なものだったため、テレ地方（メコン河岸のトンレ・ロボウ）で反乱が起き、内戦状態になった。状況を沈静化させるため、オクニヤ・デ・チューは「心から信頼していた二人のマライ人」²⁶ オクニヤ・ラカサマナとカンコナ〔モルガ、1966：137〕を呼び寄せた。しかし、ラオス王がブラウンカルの即位を支援すべく軍勢を派遣するとの報告を受けるや、彼はこの二人に命じてチュピナヌを追放し、自らはブラウンカルを迎えるためにラオスに赴いた。カンコナとオクニヤ・ラカサマナは他の大官とともに治安維持のために王国に留まった。オクニヤ・デ・チューはラオスにおいてラオス王やスペイン人たちと善後策を練った後、国内の状態を沈静化すべく、先にカンボジアに帰国した。しかし、オクニヤ・デ・チューの国内平定工作は必ずしも順調には進まなかった。ブラウンカルは、王位につくべくスペイン人達とともにカンボジアに向かったが、その際滞在したカンボジア・ラオス国境の村で、密偵からオクニヤ・デ・チューが非常に平定に手間取ってい

ること、オクニヤ・ラカサマナがチュピナヌ側についていることなど、帰国の条件が未だ整っていない旨の報告を受けた。このため一行は一時ラオスへ退却しようとした。しかし、オクニヤ・ラカサマナをはじめとするカンボジアの有力者たちがブラウンカルの側につくことを約束したため、ブラウンカルは帰国し、王位についた。チュピナヌは攻撃を受け、捕らえられて殺されたが、この作業を実行したのはカンコナとオクニヤ・ラカサマナだった〔モルガ、1966：82、137-139〕。

オクニヤ・デ・チューは、ブラウンカル王即位を支援した功により、王国最高の称号「マンバライ」²⁷をもつて呼ばれ、強大な権力を握った。前述したように、ブラウンカル（バラマラージャ五世）は「暗君」とみなされていたため、彼は王を廃位して自ら王位につこうと考えた〔モルガ、1966：140-141〕。前述した通り、カンコナとオクニヤ・ラカサマナという「二人のマライ人隊長」とオクニヤ・デ・チューとは極めて親密な関係にあり、カンコナは彼を支援した。スペイン史料を見る限り、実際の反乱にまでは至らず、彼らはスペイン人に殺害された〔モルガ、1966：141〕。このことを報告したルイス書簡は一五九八年七月二十日付であるから、この事件はそれより少し前、一五九七年後半から一五九八年前半のある時期に起きたと考えられる。ところが、

もう一人の「マライ人隊長」オクニヤ・ラカサマナは、カ
ンコナ同様オクニヤ・デ・チューと親密な関係にあったに
もかわらず、この反乱計画に加担しなかつたようである。
オクニヤ・デ・チューやカンコナとの関係に何らかの変化
があつたと思われる。

オクニヤ・デ・チューの反乱を阻止したスペイン・ポ
ルトガル勢力はカンボジアにおいてその権力を拡大した。一
方、そのことは即座にこの「マライ人隊長」及びチャム人
達との対立の激化に直結した。実際、ルイスはオクニヤ・
ラカサマナを「王国における完全な権力と支配を手に入れ
るため」の最大の障害と見ていた「モルガ、1966：144」。
オクニヤ・ラカサマナも、明らかにスペイン・ポルトガル
勢力の権力拡大を警戒していた。彼がスペイン人について
「勇敢であり、多人数の上に非常に気魄がある連中なので、
すべての主人になってしまふか、少なくとも最良のものを
手中に収めてしまふであろうと考えた」とするモルガの記
述「モルガ、1966：171」は、この点を如実に語っている。²⁸⁾
オクニヤ・ラカサマナはその軍事力を背景とし、またスペ
イン・ポルトガル勢力の権力拡大を快く思わない一部宮廷
勢力と結びつき、対決姿勢を強めていく。
ルイスの書簡やモルガの報告によれば、オクニヤ・ラカ
サマナは、彼と愛人関係にあつたブラウンカル王の継母

「モルガ、1966：83」及びカンボジアの大官らと結んで、ス
ペイン・ポルトガル勢力との対決姿勢を強めた。当時彼は
 Chol Demu (II プノンペン) の、スペイン人宿営地の近
くに居住していた「モルガ、1966：174」。 Chol Demu は、
カンボジア第一の商業都市であると同時に、メコン河下流
からの侵略に対し王都を防衛するための重要拠点でもあつ
た。ついに両者の間に衝突が起き、二回目の衝突が起きた
とき、スペイン人は「マライ人」の宿営地を襲い、略奪を
行った。これがオクニヤ・ラカサマナの反撃を招いた。彼
はスペイン・ポルトガル人達を攻撃し、彼らの多くを殺害
した。これによつてカンボジアにおけるスペイン・ポルト
ガル勢力は完全に駆逐された。

この後、カンボジアはオクニヤ・ラカサマナとその一派
に支配され、彼らは王国で権力を振るい、最後にはブラウ
ンカル王も殺害された。しかし、これによつて各地域が反
乱を起こし、收拾のつかない混乱に陥つた。この混乱の中、
オクニヤ・ラカサマナは反対勢力に敗れてチャンパーに逃
れ、そこでも軍事活動を展開して、最後には殺害された「モ
ルガ、1966：176；248」。これらの記述から、オクニヤ・ラ
カサマナは一時期かなり強力な政治権力をも掌握していた
ことがわかる。

ところで、前述したように『年代記』には Lac Sminana

る人物が登場する。しかし、彼は一貫して「トボーン・クモムの住人」とされ、官吏のタイトルも何ら付与されていない。さらに、Po Ratが「支配者」を意味するDuonが付されているのに、Lac Sminaはuparaj（副王）に過ぎず、一貫してPo Ratが上位に置かれている。その一方で、『年代記』にはヨーロッパ人も登場している。VJ本では、VessaとViloという名の二名のヨーロッパ人が「篡奪王」リエム・

チューン・ブレイ（アナカパラン）を殺し、チャウ・バニヤー・タン王子（後のパラマラージャ五世IIプラウンカル）を王位につけ、新体制を支えた。彼らはトボーン・クモム反乱の際、王とともに戦死したという[Mak Phoen, 1981: 73-75]。この内容は、最後の部分を除けばスペイン史料の記述とほぼ一致している。従って、氏名の点で一致しない点があるが、従来の研究が指摘しているように、彼らはスペイン・ポルトガル勢力の代表者であったルイス、ベロソらを指す [Mak Phoen, 1981: 221] と考えよう。

そうなること、スペイン史料において一方の主役であるベロン、ルイスらが『年代記』に登場し、「国王を支えた勢力」としてそれなりの扱いを受けているのに対し、もう一方の主役というべきオクニヤ・ラカサマナは全く無視されていることになる。仮に「トボーン・クモムのLac Smina」という形で登場していると考えても、それは単に一介の地方

勢力の主要人物の一人（首長ですらない）としての扱いに過ぎない。いずれにしても、「正統王」であるパラマラージャ五世を殺害したことで、オクニヤ・ラカサマナは、実際に有していたその地位と実力にもかかわらず、『年代記』においては低い扱いを受けることになったのである。

五、カンボジアのチャム人の森林生産物集荷活動

メコン河流域の森林地帯やベトナム中部高原地帯は、国際交易において重要な商品である沈香・象牙・犀角などの森林生産物の宝庫であった。それ故、トボーン・クモムを中心とするメコン河流域地帯に居住していたチャム人達がそうした森林生産物の集荷・販売に携わったことは十分想定できる。

それでは、彼らが扱っていた産品は具体的にはどのようなものであったのだろうか。次頁に掲げた表は、筆者が現段階で入手し得た史料から、十六〜十七世紀にかけてカンボジア産とされていた物品を摘出し、まとめたものである。この表を見ると、全産品のうち半分以上が森林生産物によって占められている。

これらの森林生産物の集荷に、チャム人達は重要な役割を果たしていた。これらの物品採集に中心的な役割を担っ

表 十六世紀～十七世紀のカンボジアの産品

トメ・ピレス	米・肉・魚・酒・黄金・ラック・象牙・乾魚[ピレス, 1966: 224]
サン・アントニオ	木綿・絹・香・安息香・米・漆・金・銀・銅・鉛・錫・象牙・犀角[Cabaton, 1914: 94]
『殊域周咨録』	銅・金顔香・篤耨香・沈香・速暫香・麝香木・白豆蔻・象・蘇木・翠羽・大風子・象牙・胡椒・黄臘・犀角・烏木・黄花木・土降香・宝石・孔雀翎(卷之八、真臘条)
『東西洋考』	犀角・象牙・鶴頂・翠羽・銅・金顔香・篤耨香・沈香・速暫香・降香・蠟・藤黄・布・獺皮・夷瓶・明角・烏角・燕窩・胡椒・紫梗・大風子・豆蔻・酒・麝香木・蘇方木・犀・象・孔雀・鸚鵡(卷三、西洋列国考、東埔寮条)
『明会典』	象・象牙・犀角・孔雀翎・寶石・土降香・蘇木・烏木・黄花木・胡椒・黄臘(卷一百五、朝貢一、東南夷上)
朱印船の交易品	鹿皮・漆・象牙・蠟・蜜・黒砂糖・水牛角・犀角・檳榔子・大楓子・胡椒・鮫・孔雀尾・木綿・鬱金[岩尾, 1985: 288]

※金顔香：ベンゾイン=安息香の一種、特にタイ産の良品を指すという説もある[山田, 1982: 187]

篤耨香：樹脂の一種であるが詳細は不明[山田, 1982: 210-215]

降香・土降香：降真香の一種。ツルンタンの心材と根の心部を指す[山田, 1982: 217 - 219]

藤黄：樹脂の一種で顔料として用いられる[周, 1989: 120]。

紫梗：ラック(カイガラムシ蠟)

獺皮・夷瓶・明角・烏角：いずれも不明

蘇方木=蘇木

麝香木：『諸蕃志 志物』に専条があるが、詳細は不明[趙, 1991: 283]。

黄花木：不明

ていたのは、ベトナム中部高原からメコン河東岸にかけての地域に居住するジャライ、エデ、ステイエンなどのいわゆる高地諸民族であるが、チャム人達は古くから彼らと密接な関係を保持していた。チャンパー碑文や高地諸民族の伝承にそうした関係を示唆する記述や語りがしばしば見られる [Hickey, 1982: 107-120]。また、前述した『年代記』の「カンボジアやBhan(ブナル)・Ratae(エデ)・Jaray(ジャライ)・Moi(モイ)の国に亡命した」チャム人達が存在したという記述から、これらの諸民族とチャム人達との関係はカンボジアでも知られるほど緊密であったことがわかる。

こうした関係を通じて、チャム人達はこれらの諸民族との交易を行う際のノウハウを蓄積していた。そして、カンボジアに逃れた後もそれを用いて彼らとの交易を継続し、メコン河流域やベトナム中部高原の森林地帯から産出する森林生産物を集荷していた。他方、クメール人はもともとそのような知識をあまり有していなかった。十六世紀から十九世紀にかけて、カンボジア国王がジャライ人の「火の王」「水の王」と定期的に交流を行っていたとの記録があるが、クメール人はその地に蔓延する熱病を恐れ、また「火の王」「水の王」の領地へ行くための道がないことを理由に自らその地へ行くことはなかった [Hickey, 1982: 136]³⁾。

高地諸民族との交易活動及びそれを通じての森林生産物の集荷・販売において、チャム人達はカンボジア王権に対して決定的に優位に立ち得たのである。

また、トボーン・クモムはメコン河流域に位置している。すなわちこの地はラオスとの交易路でもあるメコン河を押える要衝でもあった。クルスによると、当時ラオ人商人がカンボジアに多数到来し、良質の麝香と金をもたらし、その見返りとして綿織物などを持ち帰っていた [クルス, 1996: 46]。その居住地域から見ても、チャム人達はこうしたラオスとの交易にも関与し得たと考えられる。

このようにして集荷した森林生産物を、彼らはメコン・ルート、特に商業都市ノンペン（スペイン史料の Chol Dem Co）を通じて、国際交易ルートに結び付けていた。モルガは、当時 Chol Dem Co に オクニャ・ラカサマナが「マライ人」の部下とともに居住していたこと、スペイン人と「マライ人」の衝突が起きたとき、スペイン人が「マライ人」の宿営地を襲い、彼らの多くを殺害して大量の物資を奪ったと述べている [モルガ, 1966: 174-175]。当時商業都市ノンペンにかなりの数のチャム人が居住していたこと、及び彼らが活発な商業活動を行っていたことを示している。その一方で、チャム人達は陸路を通じて南シナ海世界にリンクする手段をも有していた。前述した通り、トボーン・

クモム反乱はプレイ・ノコー（現在のサイゴンIIホー・チミン市）まで拡大した。この地はベトナムの支配下に入る十七世紀以前から「ドンナイ河水系の大小の河川と十の主要運河を通じてメコンデルタや中部高原と通じる」「中部高原の森林物産の集散地」「桜井・桃木（編）、1999：3201」であり、南シナ海沿岸の有力港市の一つであった。この地と

トボーン・クモムとは、陸路によって直結している。従って、トボーン・クモム反乱がプレイ・ノコーまで拡大したことは、チャム人達が自らの拠点であるトボーン・クモムと南シナ海への出口であるプレイ・ノコーとを結び付けようとする動きであったと理解することができる。つまり、彼らは南シナ海交易世界とリンクする方法として、メコン河と陸路という二つのルートを押えており、状況に応じてこれらを利用していたのである。

六、カンボジアのチャム人、スレイ・サントー、

「新チャンパー」の相互関係

前述したように、十四世紀後半から十五世紀前半にかけて、「旧チャンパー」とカンボジアとの間には緊張関係が存在し、軍事衝突が発生することもあった。このような状況は、十六世紀に入ってもあまり変わらなかった。例えば、

ピレスはカンボジアについて「時にはジャンパー（人）とも戦って」いると記している【ピレス、1966：223】。また、ルイスもチャンパー王のことを「ずっと以前からカムボハ人の大敵であった」と述べており【モルガ、1966：136】。十六世紀を通じてカンボジアと「新チャンパー」とは緊張状態にあったことがわかる。

カンボジア王家に庇護を求め、トボーン・クモムを中心とするメコン河流域地帯に居住していたチャム人達にとって、そこより下流に位置していたチャム人達との活動域内に存在した王権であった。このため、メコン河流域の森林地帯やラオスとの交易によって得られる産品をメコン河経由で国際交易ルートに結びつけるために、トボーン・クモムのチャム人達はスレイ・サントーと良好な関係を維持しようとした。一方、スレイ・サントーにとっても、その上流に当たる地域に居住するチャム人を支配下に置くことは、やはり交易路としてのメコン・ルートの支配という観点から重要な意味を有していた。トボーン・クモム反乱の際に国王が親征したことはトボーン・クモムの掌握が王権にとって重要な意味を有していたことを示している。さらに十六世紀末、王都ロヴェックの陥落と国王のラオス逃亡により、ロヴェックを拠点とする王権は壊滅した。この結果、スレイ・サントーが、カンボジアを代表する王

権として一時的にクローズアップされることになった。一五五五年頃カンボジアを訪問したクルスが当時のカンボジアの主要都市としてロエク（ロヴェック）、チュドウルムク（チャトムック＝プノンペン）、シストル（スレイ・サントー）をあげている〔クルス、1996：47〕のに対し、十六世紀末の状況を記したサン・アントニオがあげているのはアンコール、チュルドムク、シストルであり、ロヴェックについては言及がない〔Cabaton, 1914：95〕ともこれを裏付ける³⁴⁾。また、『年代記』によればリエム・チューン・プレイ王以降三代の王がスレイ・サントーで即位したというが、リエム・チューン・プレイ以外の王は「正統王」として扱われている。スペイン史料もスレイ・サントーにいた二王＝アナカパラシとブラウンカルを「カンボジア王」と認めている。この地域は、前述した通り、メコン河流域の森林地帯から取れる森林生産物の集荷地であると同時に、ラオスとの交易路でもあるメコン河を押える要衝であり、カンボジア、チャンパー双方にとって重要な地域であった。

他方、「新チャンパー」も「交易の時代」を背景に東南アジア海域世界で活発に活動していた。「新チャンパー」の商人がマラッカ、マレー半島のパハンやパタニ、シヤム、スラウエシ島のマカッサル、マニラなどを訪れる一方で、各地の商人が「新チャンパー」の産品を入手すべく、しばし

ば寄港していた。当時「新チャンパー」の主要な産品としては、カラバンバック＝奇楠香（伽羅、最高級の沈香）、金黒檀、象牙などが知られていた〔ピレス、1966：225-226；マント、1979：131；張、2000：26-30；Manguin, 1985：12-13〕。特にカラバンバック（＝奇楠香）は、当時のヨーロッパ、中国史料双方において、「チャンパーの特産品」と明記されている。これらの産品はいずれもベトナム中部高原からメコン河流域にかけて広がる森林地帯から産出される森林生産物であった。このような森林生産物を入手するために、「新チャンパー」もベトナム中部高原からカンボジア国境地帯にかけての地域に居住する少数民族達と密接な関係を有していた〔Hickey, 1982：117〕³⁵⁾。

ところが、このような「新チャンパー」の森林生産物獲得の動きは、同じ地域から森林生産物を集荷しようとするスレイ・サントー王権と競合・抵触することになった。このため、メコン河流域の森林地帯の支配をめぐる、スレイ・サントーと「新チャンパー」は抗争することになった。そして、このようなカンボジアと「新チャンパー」の緊張状態は、カンボジアに移住し、スレイ・サントー王権と密接な関係を築いていたチャム人達と「新チャンパー」との関係にも影響を与えた。すなわち、政治的にも両者はしばしば対立関係に陥った。オクニヤ・ラカサマナらによる対

チャンパー遠征の実施はそれがもつとも顕著に現れた事例といえよう。

おわりに

以上の考察から、以下のことが明らかになった。

(1)十五世紀に積極化したベトナムの攻撃に敗北したことにより、チャンパーは一大画期を迎えた。すなわち、ヴィジャヤを中心とする「旧チャンパー」は崩壊した。それとともに、一方でカンボジアをはじめとする東南アジア諸地域へのチャム人の大量亡命が発生し、他方で南方のバーンドラングにおいて、その地の有力勢力と「旧チャンパー」からの亡命者とが結合して「新チャンパー」が成立した。

(2)カンボジアへのチャム人の大量移住の背景となったのは、十世紀以来のアンコール朝との和戦両面に及ぶ緊密な交流によって、メコン河流域を中心とする地域にチャム人のネットワークが存在していたことである。彼らは十五世紀以降カンボジアへ大量に流入して、十六世紀末までにトボーン・クコムを中心にながりの規模の勢力を形成した。

(3)十六世紀末のカンボジアにおいてチャム人が果たした役割は、従来考えられていたよりも重要であった。彼らの中にはカンボジア宮廷に仕える者も少なくなく、主にそ

の水軍力を中心とする軍事力をもってカンボジア王の厚い信任を得た。オクニヤ・ラカサマナのように宮廷内で大きな権力を掌握する者すら現れた。その一方で、王権と対立し、反乱を起こして王を殺害するなど、その活動は当時のカンボジアに多大な影響を与えた。

(4)チャム人達は、伝統的にメコン河東岸地域やベトナム中部高原に居住する高地諸民族と密接な関係を有しており、それを背景に交易を行い、森林生産物を集荷した。こうした交易活動は、スレイ・サントーに拠点を置くカンボジア王権を支えるとともに、交易をめぐって、チャム人達やカンボジア王権とフアンランの「新チャンパー」との間に競争をもたらした。

このようなチャム人達のアクティヴな活動ぶりは、東南アジア地域における「交易離散共同体(Trade Diaspora)」の典型的事例を示している。ただ、「チャム人交易離散共同体」に特徴的な点として、「軍事勢力」としての側面があることは注目に値する。この点は、同様に「交易離散共同体」として分類されるユダヤ人やアルメニア人の事例とは異なっている。

今後の課題として、第一にその後のカンボジアへのチャム人の移住と彼らの活動について考察する必要がある。一六四二年、チャム人は国王ラーマディ・パティ一世の即位を

支援し、成就させた。そして、それから二十年近くにわたって同王の治世を支え、一六五八年に王が廃位されると、それに反発して反乱を起こす。また、一六九二年には「第二の波」と呼ばれるチャム人の大移住が起こる。この大移住も、直接的にはベトナムの南進が原因とされているが、「第一の波」とは時代背景が決定的に異なる。すなわち、「第一の波」の時代はいわゆる「交易の時代」の最盛期に当たっていたが、「第二の波」は、南シナ海沿岸においてはそれが完全に退潮傾向を呈した時代に当たっていた。商業活動の衰退がこの移住にいかなる影響を与えたかという問題を考察する必要がある。

第二にカンボジアばかりでなく東南アジア各地に移住した「チャム人」の事例についても考察を進める必要がある。本稿でも指摘したが、彼らの移住先はカンボジアのみに留まらず、アユタヤやいわゆる東南アジア海域世界にまで、広い範囲に及んでいた。さまざまな移住先での彼らの活動を解明することによって、その特徴やチャンパー・チャム人のネットワークを考察することが可能になると考える。

注

(1) 本稿で考察するカンボジア以外に、メコンデルタ地域にも多数のチャム人が生活している。また、バンコックのバーン・クルア地区にもチャンパーの末裔とされるムスリムが居住しているが、本格的な研究は未だされていないようである。さらに、マレー世界にも大量の移住があり、それが各地の伝承や歴史物語その他に反映されている事例も少なくないが、こちらは現地社会に「同化」してしまっているため、「移住したチャム人」としては認識されていない。

(2) 一般にベトナムで「チャム」と言う場合、南部のニントウアン・ビントウアン両省に居住するチャムを指すことが多い。しかし、それ以外にもメコンデルタ地帯（特にカンボジア国境地帯のチャウドークなど）に居住する「チャム」もいる。前者がヒンドゥー教ないし土着文化の影響が強く見られるバニと呼ばれる土着イスラームを奉じる人々であるのに対し、後者は正統イスラームを奉じる。後者が正統なイスラーム教徒ではない前者と同一視されることを嫌う傾向が強い〔中村、2000：256〕一方で、前者は後者を「チャンパの歴史をこればかりも知らない」「チャンパの起源を忘れたチャム」と見て、蔑視する傾向がある〔中村、2001：213〕。ベトナムのフアンランにはチャム文化研究センターがあり、チャンパー及びチャム研究が進められているが、研究の対象とされているのは前者である。

(3) 一九九八年三月に実施された国勢調査では二四五、〇五六人〔National Institute of Statistics, Ministry of Planning, 2000：6-7〕。筆者が入手した一九九九年度カンボジア宗教省統計によれば四一三、七八〇人〔Ministry of

Religious and Cult, 1999] となっている。一方、ベトナムの人口は一九九九年で一三〇・九三九人〔伊藤 2000 : 275〕であり、カンボジアの半数程度に過ぎない。

(4) 特にモスク建設に関する支援については、中東諸国(個人・組織とも)が支援した旨を記したプレートがモスクやマドラサにしばしば見られる。また、二〇〇一年三月のメッカ巡礼では、サウジアラビアのファハド国王が巡礼の費用の一部を出資している。

(5) また、ノロドム・ラナリット下院議長(シハヌーク国王の息、フンシンペック党党首) 夫人もチャム人である。

(6) モスク、マドラサの建設支援や、メッカ巡礼のための特別パスポートの発給などを実施している。

(7) しかし、この調査後、このような現地調査は実施されていない。

(8) この他、中村理恵は「ベトナムのチャム人の一部」という視点からメコンデルタのチャム人について報告している〔中村 2001 : 215-219〕が、彼らとカンボジアのチャム人との関係についてはほとんど指摘していない。氏はメコンデルタのチャム人の歴史意識が必ずしもチャンパーと結び付いていないことを指摘している。ところが『年代記』の記述を見ると、メコンデルタのチャム人がカンボジアのチャム人と非常に親密な関係を有していたことがうかがえる〔Garnier, 1872: 140; Moura, 1883 : 133-135〕。したがって、彼らの歴史意識を考察する際にはベトナムよりもむしろカンボジアのチャム人との関係を視野に入れて考察する必要がある。

(9) この他に重要な版本としては、バンコック写本と一一七〇断片(別名ロヴェック年代記)がある。特に後者は、他の諸

版本と異なり、カンボジア伝来の文書に基づき作成されたものと考えられ、「チャム・マレー勢力」に関する記述内容も他の版本に比べると詳細に記されているとされる〔Vickey, 1977 : 201 : 212〕。この両版本を、筆者は今入手・検討することができなかつた。

(10) この胆(胆のう)採取の伝説は、中国史料では『島夷誌略』〔汪, 1981 : 55〕、『星槎勝覽』〔費, 1981 : 3〕が、また、十六世紀末のスペイン人サン・アントニオ〔Cabaton, 1914 : 123〕が報告しており、当時の東南アジア海域世界で広く知られていた。

(11) 『嶺外代答』や『諸蕃志』では、真臘(アンコール)、占城(チャンパー)を主要な産地とし、とりわけ真臘産のものを最上としている。

(12) ヴィッカーリーは、この記述を十六世紀末の国王であるリエム・チューン・プレイ時代の「バラレル」であると〔Vickey, 1977 : 191-192〕、アン・エーン断片は十四世紀から十五世紀初期にかけての史料としては価値を持たないと結論した〔Vickey, 1977 : 199〕。しかし、この議論は、北川香子がすでに指摘したとおり、説得力を欠いている〔北川, 2001b : 017-019〕。

(13) また、マック・ブアンによると、「勝利を得たベトナム王がチャンパーを大小の諸州に分割し、その一部をベトナムの直轄領とし、残りはドン・ドゥ(ハノイとされる) 宮廷が派遣した官吏の監視を受けつつもチャンパー王が支配した。それにより、多くのチャムの民や王族がカンボジアに逃れた」〔Max Pheunn, 1994 : 76〕という。ただし、彼はこの記録が『年代記』にあるとは述べているが、どの版本のどの箇所にあるかについては何ら述べていない。少なくとも、筆者が今入手

十五〜十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察（遠藤）

し得た諸版本の中にはこの記述は見られなかった。

- (14) ムーラ本によれば同遠征軍の規模は「兵士が十万、戦象が八百頭、軍用馬千五百頭」[Moura, 1883: 51]であった。

- (15) 石井米雄は、ナレーヌエン時代のアナタヤが強大な海軍力を有していたことを指摘した上で、その背景としてアナタヤに移住した「チャム人」の存在に注目し、彼らがその外洋航海技術を買われてアナタヤ海軍の傭兵となった可能性を提示している[石井、2001: 182]。

- (16) これ以外に、現在のクアンナム・ダナン省に位置するアマラーヴアティとニヤーチャーヤン近辺に位置するカウターラがあった。

- (17) ハリヴァアルマン四世（在位一〇七四〜一〇八〇）などは、父は「椰子」のクランに属していたが、「檳榔樹」のクランに生まれた母を持っていたことを誇りとしていたという[Maspero, 1988: 18-19]。

- (18) ただし、リエム・チュオン・プレイが「篡奪王」として扱われているが故の潤色が『年代記』の記述になされている可能性を考慮する必要がある。マック・プアンは同王が実施したチャンパー遠征を、王権の安定と強力を証明するものと評価している[Mak Pheoun, 1995: 64]。

- (19) 彼らが、「シアンの王による（カンボジア）王国の壊滅」の際にチャンパーに赴いたことや、後にカンボジアを追放されたとき逃れた先がチャンパーであったことは、彼らがチャンパーと何らかの関係を有していたことを示唆している。

- (20) スペイン史料も、当時の状況について「プラウンカル王は、彼の王国に復位していたが、いくつかの地方はまだ平定されていなかった」[モルガ、1966: 170]と記し、国内が混乱して

いたことを裏付けている。

- (21) ただし、本稿において利用したのはウィツカリーの引用[Vickey, 1977: 206-211]であり、史料としての二一七〇断片そのものではない。

- (22) マック・プアンは、『年代記』諸版本を検討した結果、この反乱が起きた年を二五九九年または一六〇〇年としている[Mak Pheoun, 1995: 89]。

- (23) ヲJ本によれば、この二人は兄弟であった[Mak Pheoun, 1981: 75]。また、VJ本以外の諸本では、前者はチャム人、後者はマレー人とされている[Mak Pheoun, 1995: 89]。いずれにしても、『年代記』において「チャム人」と「マレー人」とはほとんど区別されていない。それ故、一般に「チャム・マレー勢力」「マレー人」と呼ばれている勢力をも、本稿では「チャム人」と統一して表記することにする。

- (24) この言葉は、チャム語で「支配者」を意味し、カンボジアのチャム人達はこれを「指導者」の意味で用いていた[Mak Pheoun, 1981: 230]。

- (25) ただし、反乱を起こした人物の名については、版本により微妙に異なる。VJ本・ムーラ本はPo Rat-Lac Sminnaであるが、ガルニエ本は「チャム人ChoraとChhvea Slnac smonai」[Garnier, 1871: 359]、一七〇断片では「khaek Laksmana」とトボン・クモムに居住するチャム人[Popras] [Vickey, 1977: 209-210]となっている。一七〇断片のみ順序が逆になりLaksmanaが先になっているが、この理由については不明である。

- (26) オクニヤ・デ・チューはアナカバラン時代に実施されたチャンパー遠征の総司令官でもあった[モルガ、1966: 136]。カ

ンコナ及びオクニヤ・ラカサマナとの関係もこのころ結ばれたと考えられる。

(27) グロリエはこれを現在のモントレイ(大臣)と考える[「グロリエ」1997:211]が、「マック・プアンは不明としている」[Mak Phœun, 1995: 84]。

(28) またルイスは、国王自身スペイン人に王国を奪われはしないかと心配し、またスペイン人によるその実力があると考えているが、それを吹き込んでいるのはモロ(イスラーム教徒)である(と述べ、彼らを「われわれの敵」であるとも報告している)「モルガ、1966: 145」。

(29) なお、ルイスは、ポルトガル人ベロンがカンボジアの行政官になってその裁治権をマラカに渡そうとしているので、それを阻止するために「できる限りの人数」をマニラから派遣してほしいと述べており[「モルガ、1966: 146」]、当時カンボジアにいたスペイン人とポルトガル人との間にも対立があったことがうかがえる。

(30) ただし、唯一の例外が一一七〇断片である。これによると「khaek Lacsmāna」とトボーン・クモムのチャム人「Popras」が支持者を集めて反乱を起した[「Vickery, 1977: 209-210」]という。この記述を素直に読めばkhaek Lacsmānaは「トボーン・クモムの住民ではないこと」になる。また「khaek」という何らかのタイトルと思われる単語が付随している。「オクニヤ・ラカサマナ」との一致点が存在する可能性がある(こと)になる。ただし「khaek」の意味は不明である。

(31) ムーラ本にも同様にヨーロッパ人が登場するが、彼らが最終的にどのような運命をたどったかについては何も述べていない。

(32) スペイン・ポルトガル勢力もカンボジア側から見れば「異邦人」であるにもかかわらず、VJ本の中でそれなりの扱いを受けている要因として、同本が二十世紀始めに編纂されたことを考慮に入れると、編纂者(=当時の知識人が有したヨーロッパ志向の心理を指摘することもできよう。このような心理は、現在でも王党派の中ではかなり濃厚に見られる。

(33) このためカンボジア王が彼らに贈った品物は、全て高地諸民族の手を経由して届けられたという。この際窓口となった場所であった[「Hickey, 1982: 125」]。こうした作業にチャム人達が関与していた可能性も否定できない。

(34) モルガも同様である。ただし、彼はアンコールについては言及していない。

(35) 特に、ラグライ人との関係は親密であり、「新チャンパー」は彼らを通じてカランバックを入手していた[「Hickey, 1982: 117」]。

(36) 「政治的に独立した特定領域を持った国家」というものを持たないで交易に従事している人びと[「田村、1997: 19」]を意味する。

略号

BEFFO : Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient.

JA : Journal Asiatique

JMBRAS : Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society

十五～十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察（遠藤）

史料

(一)『カンボジア王朝年代記』

①『ラー本』(公訳)

Khin Sok 1988 *Chroniques Royales du Cambodge*(de Banā

Vai à la Prise de Lannaekle 1417 à 1595). *Traduction*

Française avec Comparaison des Différentes Versions et

Introduction, Paris : École Française d'Extrême Orient.

Mak Pheun 1981 *Chroniques Royales du Cambodge (de*

1594 à 1677). *Traduction Française avec Comparaison des*

Différentes Versions et Introduction, Paris : École

Française d'Extrême Orient.

②『ガハニト本』

Garnier, F 1871-72 “Chronique Royale du Cambodge” *JA*

18 (67): pp. 336-385 ; 20(2) : pp. 112-144.

③『ヤーニ本』

Moura, J 1883 *Le Royaume du Cambodge*. Tome 2. Paris.

④『アン・エーン断片』(公訳)

Codès, G 1989 “Essai de Classification des Documents

Historiques Cambodgiens conservés a la Bibliothèque de

l'École Française d'Extrême-Orient” *Articles sur le Pays*

Khmer, pp. 67-80. Presses de l'École Française d'Extrême

Orient, Paris.

(2) ノS 徳S 邦築

Brown, C.C (tr.) 1970 *Sejarah Melayu or Malay Annals*.

Kuala Lumpur.

Cabaton, A 1904 “L'Inscription Chame de Bien-Hoa”

BEFFO Tome IV, Hanoi, pp. 687-690.

1914 *Breve et Vèridique Relation des*

Evènements du Cambodge par Gabriel Quiroga de

San Antonio : Nouvelle Edition du Texte Espagnol

avec une traduction et des notes, Paris.

吳士連 一九八五 『大越史記全書(中)』東洋学文獻センター

叢刊第四十四輯、陳荊和(編校)、東京大学東洋文化研究所付

属東洋学文獻センター

趙汝适 一九九一 『諸蕃志』関西大学東西学術研究所訳注、

リーズ五、藤善真澄(訳注)、関西大学出版部

クルス・ガスパール・ダ 一九九六 『クルス』中国誌、一ポ

ルトガル人宣教師が見た十六世紀の華南』日笠博司(編訳)、

新人物往来社

嚴從簡 一九九三 『殊域周咨錄』中外交通史籍叢刊、余思黎

(点校)、中華書局

費信 一九八一 『星槎勝覽』人文文庫一三八〇、馮承鈞(校

注)、台湾商務印書館

モルガ・アントニオ・デ 一九六六 『フィリピン諸島誌』大

航海時代叢書七、神吉敬三：箭内賢次(訳)、岩波書店

ピント・メンデス 一九七九 『東洋通歴史(一)』東洋文庫三

六六、岡村多希子(訳)、平凡社

ピレス・トメ 一九六六 『東方諸国記』大航海時代叢書五、

生田滋、加藤栄一、長岡新治郎(訳注)、池上孝夫(訳)、岩

波書店

汪大淵 一九八一 『島夷誌略』中外交通史籍叢刊、蘇繼庠(校

釈)、中華書局

周去非 一九九九 『嶺外代答』中外交通史籍叢刊十六、楊武

泉(校注)、中華書局

周達観 一九八九 『真臘風土記』 東洋文庫五〇七、和田久徳
(訳注)、平凡社

シヨワジ&タシャル 一九九一 『シヤム旅行記』 十七・十八世紀大旅行記叢書七、鈴木康司；二ノ宮フサ(訳)、岩波書店

張燮 二〇〇〇 『東西洋考』 中外交通史籍叢刊五、謝方(点校)、中華書局

『明実録』 中央研究院歴史言語研究所校印本
『明会典』 国学基本叢書四百種本

参考文献

綾部恒雄・石井米雄(編) 一九九六 『もっと知りたいカンボジア』 弘文堂

Aymonier, E. 2000 "The Chams and Their Religions", *Cham Scripture, Religious Ceremonies and Superstitions*, Translated by Walter E.J. Tips, pp. 21-65, Bangkok : White Rotus Press.

Briggs, P.J. 1950 "Spanish Intervention in Cambodia 1593-1603", *Toung Pao*, Vol 39, Leiden : E.J.Brill, pp. 132-160.

Cœdès, G. 1968 *The Indianized States of Southeast Asia*, Hawaii : University of Hawaii Press.

遠藤正之 一九九五 「十〜十五世紀チャン王国の構造」『東洋史学論集第二号』立教大学大学院文学研究科史学専攻、七三〜九一頁。

グロリエ・ベルナル・フィリップ 一九九七 『西欧が見たア

ンコールー 水利都市アンコールの繁栄と没落』石澤良昭・中島節子(訳)、連合出版

Hickey, G.C. 1982 *Sons of the Mountains — Ethnohistory of the Vietnamies Central Highlands to 1954*, New Haven and London.

今永清二 一九九八 「カンボジアのチャム人イスラム社会調査概要」『東北タイ・ラオス・カンボジアのムスリム共同体の学術調査』平成七・八・九年度文部省科学研究費補助金国際学術研究(学術調査)〇七〇四二〇〇研究成果報告』八一〜一四三頁。

石井米雄 二〇〇一 「後期アユタヤ」岩波講座東南アジア史 三―東南アジア近世の成立』岩波書店、二七九〜二〇三頁。
伊藤正子 二〇〇〇 「国家による公定民族分類―ベトナムの民族政策の意外な落とし穴」『ベトナムの社会と文化 第二号』二六八〜二七九頁。風響社

岩尾成一 一九八五 『新版 朱印船貿易史の研究』吉川弘文館

北川香子 一九九四 「ポスト・アンコール期カンボジアの諸

タイトルについて」『東南アジア―歴史と文化―』二十三号、四三〜六二頁。

……………一九九九 「ポスト・アンコール」『新版世界各国史

五 東南アジア史―大陸部(石井米雄・桜井由躬雄編)』山川出版社、二三三〜二五五頁。

……………二〇〇〇 「水王」の系譜―スレイ・サントー王権

史―『東南アジア研究』第三十八卷一号、五〇〜七三頁。
……………二〇〇一 a 「ポスト・アンコール」『岩波講座東南

アジア史四―東南アジア近世国家群の展開』岩波書店、一三

十五〜十六世紀におけるチャム人の移住と活動に関する一考察(遠藤)

三〇一五八頁。

……………二〇〇一b 「カンボジア年代記と口承伝承——チャ
ン・リエチエ王像をめぐる」『東洋学報』第八十三卷第二号、
〇一〇三三頁。

Lafont, P. B et Po Dharna 1989 *Bibliographie Campā et
Cam. Paris.*

Lobet, L 1997 *De l'intégration des Cham au Cambodge.*

Aix-en-Provence.

Mak Phœun 1990 "La communauté malaise musulmane
au Cambodge (de la fin du XVII^e siècle jusqu'au roi
musulman Rāmahīpati I^{er} " *Le Monde Indochinois et
la Péninsule Malaise*, Kuala Lumpur, pp. 47-68.

……………1994 "The Cham Community in Cambodia
from the Fifteenth to the Nineteenth century —
Historical development of its resettlement and its role
in Cambodian political life", *Proceeding of the Seminar
on Champa at the University of Copenhagen on May 23,
1987*, Rancho Cordova : Southeast Asia Community
Resource Center, pp.76-86.

……………1995 *Histoire du Cambodge de la fin du XVII^e
siècle au début du XVIII^e*, Presses de l'École Française
d'Extrême Orient, Paris.

Manguin, P.Y 1985 "The Introduction of Islam into
Champa", *JMBRAS Vol 58, Part 1*, Singapore, pp. 1-28
(Translated by Robert Nicholl).

Maspero, G 1988 *Le Royaume de Champa*, École

Française d'Extrême Orient (reprint), Paris.

中村理恵 一九九九 「メトナム中南部のチャム族——チャム
とバニ」『メトナムの社会と文化 第一号』二七九〜一九七頁。
風響社

……………二〇〇〇 「あの子は、ソニー・グロバリーゼーショ
ンの中のエスニシテイー」『メトナムの社会と文化 第二号』
二五一〜二六七頁。風響社

……………二〇〇一 「チャンパかアンコールか——チャムの
エスニシテイーと彼らの歴史認識」『メトナムの社会と文化
第三号』二一一〜二二三頁。風響社

Ner, M 1942 "Les Musmans de l'Indochine Française",
BEFEO Tome XL I, Hanoi, pp. 151-207.

桃木至朗 一九九四 「あたらしいチャンパ史」、『チャンパ王国
の遺跡と文化』(チャンパ王国の遺跡と文化展実行委員会編)、
六五〜七二頁。トヨタ財団

……………一九九九 「新しい歴史——東南アジアとチャンパ
から」『チャンパ——歴史・末裔・建築』『めいん』一三三〜九六頁。
……………二〇〇一 「東南アジアの海と陸——チャンパとチャ
ム族のネットワーク」、『海のアジア——島とひとのダイナ
ミズム』(尾本・浜下・村井・家島編)、岩波書店、六一〜八四
頁。

Reid, A 1999 *Charting the Shape of Early Modern
Southeast Asia*, Silksworm books, Chiang Mai.

桜井由躬雄・桃木至朗(編) 1999 『メトナムの辞典』(同朋
舎)

田村愛理 一九九七 『世界史の中のマイノリティ』(世界史リ
ブレット五三) 山川出版社

Vickery, M 1977 *Cambodia after Angkor : The Chronicalar Evidence for the Fourteenth to Sixteenth Centuries*. Ann Arbor.

山田憲太郎 一九八二『南海香葉譜——スパイス・ルートの研究』法政大学出版局

統計資料

Commission Européenne Cellule d'Appui au Développement. 1999 *Atlas Electoral, Elections Législatives du 26 Juillet 1998*. Phnom Penh.

Ministry of Religions and Cult, Kingdom of Cambodia 1999 *Statistics of Islamic Population inside and outside of Cambodia*. Phnom Penh.

National Institute of Statistics, Ministry of Planning, Kingdom of Cambodia 2000 *General Popuration Census of Cambodia 1998—Census Tables at National Level Cambodia*. Phnom Penh.

(立教大学史学専攻後期課程)

Migration of the Cham and their Role in Cambodian Society,
from the 15th to 16th Century.

by ENDO Masayuki

This article discusses the migration of Cham people to Southeast Asia, especially to Cambodia and, their active role in the reestablishment of the kingdom of Cambodia. Since about the 10th century, Champa and Angkor had been closely connected through trade and sometimes through wars. Through those activities, Cham people had established their networks and communities in Cambodia, especially in valleys of Mekong river. After Champa which centered at Vijaya(present Binh Ðinh province)collapsed by the “Southward Movement (Nam-Tien)” by the Vietnamese in 1471, many Cham people migrated to Cambodia and Pānduranga(present Phan Rang region).

Cham people had established firm relations with hill peoples who lived in valleys of the Mekong river and plateaus of central Vietnam since early centuries. Through those relations, Cham people successfully collected precious forest products. Such activities helped to accumulate their power in Cambodian society. Cham people began to play an important role in the integration of Cambodia. They served at the Cambodian court and successfully gained confidence of kings. Some of them even gained the greater power than the king so that one of the Cambodian kings was killed by their rebellion. Although studies so far have not paid much attention to the role of Cham migrants in Cambodia, these people appear to have exercised no less influence on Cambodian society at the 16th century.

十五
十六世紀における
チャム人の移住と
活動に関する一
考察(遠藤)